

巨乳

令嬢

M
C

学園

おっぱい
おっぱい

巨乳令嬢MC学園



著：布施はるか

画：スカイハウス
原作：ルネ

PB オトナ文庫



やがて、こはるの姿が見えなくなると、拓海は何度目かの深いため息をつく。「バカ……僕って奴は、どうして……! そんな調子に乗って……!」自分勝手な思い込みで舞い上がって告白し、もの見事に棄つて……! 脈のない完全な拒絶を示されて、志願で、失恋の落ち込みよりも自分のママキを恥じる気持ちのほうが強い。

拓海は大きくかぶりを振って気持ちを切り替え、こはるの言葉を思い返し、「けど(吉祥寺さん)……(氣遣ってあげくれ)？ なんだよ、それ……?」もとほと言えは、吉祥寺さんが今の状態にたくせに……!

拓海には、わけわからぬ。たひつと確かなことは、こはるには本当に同情的になかったということだ。一度容れを迫ってしまった以上、もうそれが覆れることなどありはしない。灯られると思った光は再び闇に呑み込まれ、深い絶望の中に沈んでいく。「もう嫌だ、こんな学校……、来なけりやよかつた……!」

「いつぞ、辞めてやろうか、そんなことも思ってたが、特別英学校で名門校に入学しておきなから途中で自主退学したとなれば、どうしたところで問題児のレッテルを貼られてしまふ。そうなれば将来の展望……、進学も就職も絶望的になるだろう。これは拓海ひとりだけの問題ではすまなかつた。推測した母校や、父の顔にも泥を塗ることになる。ダメだ……。」

「こを出たって、状況は何も変わらなかつた。きつとそうなるだろうという。どうしてそう思うのか、自分で根拠も何も変わらなかつた。きつとそうなるだろうという確信だけが胸に残った。」

「結局……、卒業までじつと耐えるしかないのか……!」
通り着いた苦々しい結論に、拓海はまた目眩が強くなって、いくのを感じていた。

＊ ＊ ＊

翌朝、拓海は睡りまわすように気配を殺して教室に入った。途端に視線が「斉」に集まり、除口のようなヒソヒソ話が拓海の耳にも届く。そうなることはわかっていたが、だからといって学校を休むというわけにはいかなかった。と拓海は思う。たとえ具合が悪くても、欠席には医務室での診察証明が必要で、ただ連絡をすればいいというものではない。自分の席が教室の隅にあるのが、せめてより悪化させないためにも出席せざるを得ない。自分の腰を下ろすと、先に登校していたこはるが、拓海に気づく。小さくペコリと頭を下げてきたが、やはり気まずいのか、そのまま目を逸らしてしまう。当然だろう。拓海自身が時いた種だ。

今日はいよいよよ味方なし。拓海は陰鬱な顔でため息をつき、懐に忍ばせていたポータブル音楽プレイヤーに繋いだイヤホンをつけた。むろん、見つかったら即没収である。

それでも、ヒソヒソ交わされる除口に神経をすり減らすくらいなら、没収覚悟で好きな曲を聴いていたほうがマシだ。念のためにイヤホンのコードを手で隠し、拓海はプレイヤーのスイッチを入れた。大好きなインスタントトルメンタルが聴こえてくると、ほんの少しだけモヤモヤが晴れてくれる。欲を言えは両耳で、もっと大音量で聴きたかったが、そのせいで見つかっては元も子もない。今の拓海は、なにげなく机に突っ伏すだけでも、どんな言いがかりをつけられるかわからないものではないのだ。

耳もとを掌で覆い、なるべく不自然にならないように空いている手で教科書を抱え、イヤホンを着けていない側の耳に固唾の音が届くもの、何を言っているのかまでは聞かれない。自分の悪口を言われていたとしても、内容が聞きとれればたまたまのノイズだ。心が傷つくこともない。拓海はわずかに音量を上げ、音楽に意識を集中させた。ほどなくして、風紀委員の久我友里子が静かに教室へ入ってくる。途端に、賑々しく談笑していたクラスの女子の間に緊張感が生まれた。クラスのリーダーである吉祥寺アリサが教室に入るのは毎朝遅い。先に友里子が教室へと入り、她んだ雰囲気を引き締めるのが暗黙の了解のようになっていた。

「新庄さん、もう予約が満ちますよ。早く席につきなさい!」
「まだ少し時間は余裕はあつたが、まるで教師のごとき注意がクラスメイトへと飛ぶ。その仕切りを反発する者は皆無で、自然と私語が減っていく。」

「久我さん、今日はいつもより……(機嫌斜め)」

「またアイツが問題を起こすからでしょ? クラスの秩序が乱れるもの。」
密やかな、それでいてどこか聞こえよがしな拓海への除口。けれど、なぜ友里子は注意をしない。それもまた暗黙の了解なのだ。

拓海にしてみれば堪ったものではない。耐えがたいストレスに苛まれ、机の上に握るよううにして頭をかかえ込んだ。もうすぐ、ホームルームが始まる。それまでの半端だ。そうこうする中、毎朝恒例となる予約代わりのオルゴールの音色が校舎に流れ始めた。その直後であった。拓海はいきなり強い目眩に襲われ、一瞬意識が飛びそうになる。あるいは、それもまたストレスのせいなのか、とにかく頭がクラクラして気分が悪い。辛うじて片耳につけたイヤホンから流れる音楽が、はやけた意識をもとに戻してくれる。

「ん……?」
なにげなく周囲を見渡した拓海は、教室を覆う奇妙な雰囲気気がついた。いつもの間に人が気配が完全に消え去っていった。拓海への除口どころか、かすがなぞめきすらない。人の気配がいきなり希薄になつたことさえ感じられる。見れば、クラスメイト達は「斉」に宙をぼんやりと見上げているではないか。

入学以来、初めて直視した状況に、拓海は戸惑うばかりだった。そこでふと、友里子がひとり無言で席を立つ。そのまま、ゆつくりと教室内を歩き、注意深くクラスメイトの様子を確かめている。たまたま状況に、拓海は暗黙に明後日の方向へ顔を向け、ぼんやりしているふうを装った。皆と同じにしていなければ大変なことになる。そんな気がした。

＊ ＊ ＊

＊ ＊ ＊

＊ ＊ ＊

＊ ＊ ＊

＊ ＊ ＊

＊ ＊ ＊